

大学教育における「知」・「技」の地域貢献

ー伝統工芸品大島紬を用いた独創的な洋装品製作11年間の試みー

西之園君子, 柳井谷夏絵, 谷宮 杏里

How University Knowledge and Skill Contributes to the Regional Area :
Eleven Years Promoting Ohshima Tsumugi for Use
in Western-style Garments

Kimiko Nishinosono, Natsue Yanaidani and Anri Tanimiya

鹿児島の伝統工芸品大島紬は奄美に自生するテーチ木のタンニン酸色素と泥田の中に含まれる二酸化鉄の反応による古代染織法を継承している特徴ある織物である。奄美大島の歴史を遡ると、7～8世紀は中国大陸への遣唐使の寄港地として大陸文化の影響を受けた。17世紀にはインド発祥の絣が台湾-琉球を経て奄美に伝わり、これらの豊かな服飾文化が大島紬染織技法を発展させたと考えられる。自家用として手括りの絣糸で織られた大島紬は、明治後期に開発された締機により精密な絣織物となった。これに伴い品質が向上して市場価値も高まり、高級絹絣織物として名声を博してきた。

一方、戦後の生活スタイルの洋装化はきもの離れに拍車をかけ需要は低迷し、紬業界は減反を強いられるという危機的な状況にある。

このような状況を鑑み、鹿児島の服飾文化を若者に継承する大学教育の一環として平成20年に教育カリキュラムに『地域文化研究』科目を導入して研究を強化することにした。平成15年から今日まで地域貢献として取り組んできた成果を分析し大島紬を現代に活かす課題について要約する。

Key Words: [伝統工芸品] [大島紬] [泥染め] [絣] [古代染色]

(Received September 24, 2014)

1. 緒 言

郷土鹿児島の代表的な服飾文化である大島紬は全国でも知名度の高い高級紬織物として支持されている。これまできもの生活に馴染んできた年輩者やきもの愛好家は大島紬の着心地の良さと品格ある装いに魅せられ、愛用されるきものであると察せられる。

しかし、生活様式の洋風化に伴い戦後生まれの若い世代では、冠婚葬祭、成人式等以外はきものを着用する機会が少なくなり、きもの離れが加速している。さらに一人では着付けができない、活動しにくい、しかも高額というイメージがあり身近な衣装と考えにくいこと等も挙げ

*鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻生活クリエイティブコース (〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号)

られる。

このような状況において、平成15年、大島紬活性化推進の一環¹⁾として、丸久織物協同組合よりドレス用に開発された広幅(140cm)の大島紬の提供を受けドレスの製作を依頼された。

引き受けるにあたっては、学生の手先の作業能力が年々低下している状況から、高価な大島紬を用いた作品製作は容易でないという思いがあった。

しかし、今日のファッションリーダーである若い学生たちなら柔軟な発想と独創性を発揮できるのではないかと、さらに、高等教育機関の大学として、郷土の伝統工芸品大島紬の精緻な緋文様と古代染色の染織技法を若い世代に伝承していくことは重要と考え、産学連携事業として取り組んだ。

はじめて大島紬を目にした学生たちは、紬のしなやかさや優しい光沢、細やかな緋の模様などに魅せられ、夏季休暇中に製作に取り組んだ。若者らしい発想のデザインを取り入れ縫製も丹精込めて作り上げた。この作品を大学祭でファッションショーとして一般に公開すると、この成果は予想以上の好評を博し、年々学生たちの大島紬に関するモチベーションが高まり、さらに独創的な作品製作を目指し現在に至っている。

2. 研究の概要

(1)研究取り組み期間

平成15年度～平成26年度(現在に至る)

(2)研究助成費並びに大島紬の提供について

平成15年～23年度は、私立大学教育研究高度化推進特別補助を受けた。

平成15年～18年度は、本場大島紬織物協同組合より大島紬4～5反の提供を受けた。

成果は報告書や資料集にまとめ、関係機関に配布した。

(3)教育カリキュラムへの導入

平成20年度からは生活クリエイティブコースのカリキュラムに「地域文化研究」科目として導入した。

(4)ファッションショーに関するアンケート調査実施

平成15年度、平成18年度の結果を分析した。

(5)ファッションショーのテーマ及び開催場所

本学学園祭、百貨店、県民交流センター、地域の諸イベントで実施。

3. 大島紬の歴史と制作技術・デザイン

(1) 大島紬発祥の歴史「道の島、綾織、緋のルーツ」

奄美における紬の歴史は古く、奈良朝(西暦710～793年)以前に遡り、聖武天皇の東大寺の献物帳に南島から「七條褐色紬袈裟一領…」が献上された²⁾と記録されている。7世紀³⁾は奄美の人々が大和朝廷と頻繁に交易していた頃で、日本古代の染織技術が伝えられていたことが考えられ、ここに示される『褐色紬』は、奄美大島を発祥の地とする「大島紬」ではないかと

推論できる。これが国立国会図書館に所蔵されている献物帳である。(図1)

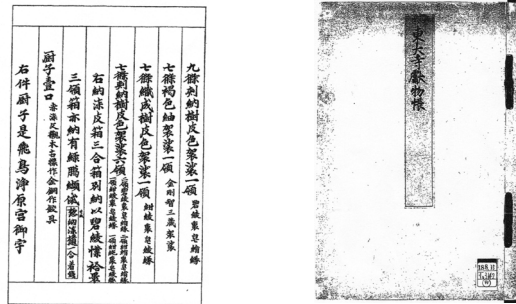


図1 東大寺献物帳

我が国が奈良時代に中国に遣唐使を派遣した際、奄美は寄港地になっていたことで、唐の華麗な織物⁴⁾や古代染色が伝来したと推測される。奄美は遣唐使派遣の航路として北路と南路、南島路が記されている。筑紫を出てから平戸－天草－薩摩を経て、種子島－奄美－沖縄－久米島等の島々を経由して南下。さらに東シナ海を横断して長江河口域、杭州湾沿岸に着岸するコースを木宮・森⁵⁾等が提唱している。このような交易によって中国の織物である綾織、唐織など高度の機織の技術が伝わり、その染織技術が奄美大島に保存伝達されていることが判明した。郷土史家の茂野幽考氏が大島郡徳之島町花徳で、前田好文家の曾祖母である熊元めんださんが享保2年（1716年）に織った装身具（奄美ではヒレと称する）を発見した。京都国立博物館文武技官、北村哲郎氏により「織り方、デザインなど」が中国から伝わった染織技術にほぼ間違いないと鑑定された。大きさは長さ217cm、幅35cm、木綿地を藍染して、絹糸（ヨコ糸）だけを使って端正な幾何学模様様が織られている。約300年の歴史を伝承する貴重な服飾文化遺産といえる。現物（写真1）は鹿児島市在住の前田家に所蔵されている。



写真1 古代綾織（平成26年10月撮影）

一方、大島紬の緋技法が何時、また何処から伝承されたかは明らかではないが、徳島県阿波藍染の技術保持者、上田利夫氏の記す阿波藍民族史⁶⁾によると、インドのイカットの技法がジャワ－ボルネオ－フィリピン－台湾－琉球を経て17世紀に奄美大島－九州－伊予－越後に伝来したと記している。

また大島紬の研究⁷⁾⁸⁾によると15世紀に沖縄へ伝来。八重山では白紬、宮古群島では宮古上布、沖縄本島では絵紬を生み出し、次いで久米島紬と奄美大島の大島紬を作り上げて九州に達し、文政5年(1740年)には薩摩紬になったと記されている。15～16世紀に琉球の紬を入手し、17～19世紀にはすでに奄美大島において紬が織られていたことが、江戸後期に書かれた奄美大島の「南東雑話」⁹⁾に紬のことをトリキリと称した手括りの絵図が存在することからも明白である。(図2)

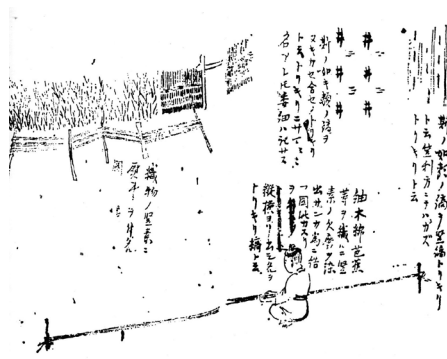


図2 トリキリ

以上の伝來說から、南方から北上の途中に奄美へ寄港した交易船が織物文化をもたらしたと考える。中国大陸の服飾文化である綾織・唐織の技術とインドを起源とする南島諸島から伝来した紬の技法が同化して受け継がれ今日の大島紬へと発展してきたと考察できる。

琉球の紬文様は動植物の絵模様や大柄文様が多いが、奄美の紬は小紬の点紬で、文様は綾織の斜文が基本で織細な点と線の組み合わせ等の表現形式となっている。

(2) 大島紬の紬締め技法

大島紬の第一の特徴は締機¹⁰⁾による織締めで、これは大島紬独特のものである。締機に木綿糸をかけ、絹練り糸を糊づけしたものを緯糸として打ち込み、経の上下で強く締め付ける。締め上がると筵状になり筵筵といわれる。それを染色すると経糸で締め付けられたところだけは染まらずに白い紬となって残る。手括りの方法に比べて極めて正確精密である。第二の特徴は大島紬の模様である。織締染織技法により一点一点がくっきり浮かび出る紬模様で構成されている。このため、経緯の紬点を正確に合わせ、模様が崩れないように織りだすよう手機による作業に頼らねばならない。製織は、緯紬を一杼打ち込むごとに経紬に正確に合わせて織り、7cm織るごとに経紬のずれを一本一本引き出して調整しながら精緻な紬模様を完成させる高度な熟練技術が必要である。

(3) 大島紬の古代染色法・染料について

大島紬の特徴である艶やかな渋い黒の色調は古代染色法を受け継いだ泥染めの効果によるものである。大島紬は奄美に自生するテーチ木の木片を約14時間煎じた液で数十回染めると、タンニン酸色素によって赤褐色に変わる。この樹液による染色を約20回繰り返すごとに泥田で1回泥染めを行う。樹液による染色と泥染めの工程を3～4回繰り返すとテーチ木のタンニン酸色素と泥の鉄分が化合して、糸は柔軟になり独特の渋い黒の色調に染め上る。石橋¹¹⁾によると、

奄美の泥染め用泥土と鉄イオン濃度が等しい鉄塩類溶液を泥田の代わりに大島紬の染色に使用しても、黒の色調に著しい差があることが明らかにされている。このことは泥染めにおいては鉄イオンだけでなく、泥土中の多くの無機物および有機物が関連していることを示唆している。

次に、脇元¹²⁾等は奄美大島の地層は中生代白亜紀の粘板岩・泥岩と砂質泥岩の互層からなり、鉄分が豊富で泥の粒子が細かく粘土鉱物が低いことを解明している。大島紬の独特の深い黒色に染色する条件として、泥田の水質が還元状態であること（酸素が少ないと泥の表面の不溶態の鉄が二価鉄イオンとして溶出する。）、染色に必要な鉄は二価鉄であることが示されている。泥土中には鉄還元細菌をはじめとする多種多様の微生物が存在し、鉄を二価に変えると述べられている。

これらの研究から、大島紬独特の深い黒は奄美大島の泥田でないと発色できないことが分かる。

さらに、亜熱帯に属する奄美の気候は冬季でも芭蕉、苧麻、桑木等の繊維植物やヒル木、チン木、山桃、椎など、染の原料となる草木が多く自生している。このため、草木染料¹³⁾を用いて古代染色を行っていたことが考えられる。

上村の研究¹⁴⁾によると大島紬の染料には、テーチ木の他に表1に示す草木が用いられたと記されている。

表1 奄美大島諸島の草木染

和 名	学 名	分 類	色 相	媒染後の色相
シャリンバイ	<i>Rhaphiolepis indica var.umbellata</i>	バラ科	赤褐色	鉄 黒茶
ヒルギ	<i>Bruguiera gymnorrhiza</i> , L	ヒルギ科	茶色	石灰 赤褐色
ヤマモモ	<i>Myrica rubra</i>	ヤマモモ科	褐色	
クチナシ	<i>Gardenia florida</i> , L	アカネ科	黄赤色	
アイ	<i>Indigofera tinctoria</i>	タデ科	青色系	
サトイモ	<i>Alocasia antiquorum</i> , Schott	テンナンショウ科	赤茶色	鉄 黒茶
カリヤス	<i>Miscanthus tinctorius</i> , Hack	イネ科	黄色	
ウコン	<i>Curcuma longa</i> , L	ショウガ科	黄色	
フクギ	<i>Spicata</i> , Hook	オトギリソウ科	黄色	鉄 オリーブ
シイノキ	<i>Pasania siboldi</i> , Makino	ブナ科	茶褐色	鉄 黒
ハマゴウ	<i>Vitex rotundifolia</i> , L	クマツヅラ科	青色	
ビンロウジ	<i>Acacia catechu</i>	ヤシ科	薄い赤色	
シラカシ	<i>Itospermum officinal</i>	ブナ科	薄茶色	
ハジ	<i>Rhus succedanea</i> , L	ウルシ科	黄茶	灰汁 黄褐色

昭和に入ると従来の泥染め大島紬に加えて新たな技法が開発され、藍大島、泥藍大島、色大島、白大島、草木染め等多彩となった。(写真2)

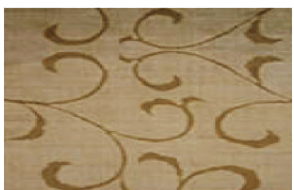
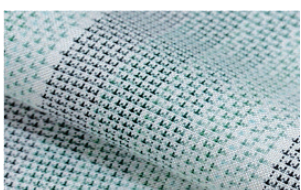
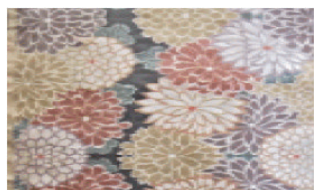



		
草木染め 植物から抽出した色素	白大島 白・淡地色の大島紬	色大島 合成染料の多彩な色調
		
藍大島 植物藍で染めた大島紬	泥大島 テーチ木と泥土	泥藍大島 泥染めと藍染めを併用

写真2 大島紬の染色法

(4) 真綿から紡いだ糸から本絹糸採用への変遷

本来紬織物は真綿より紡いだ手紬糸を経糸、緯糸を片糸か両方に用いて織っていた。糸の太さも不均一で所々に節があり風合いは硬く感じる。古代日本の様子を記した「魏志倭人伝」では稲、苧麻、桑等を植え、養蚕が盛んで繭を手で紡いだ糸を用いていたと記されており、奄美では自家用のきもの又は贈答用として織っていたと考えられる。このような紬を泥染めして製織したものを代官に贈呈したところ¹⁵⁾、下着用として非常に心地よく、冬は温かで、その質も丈夫であることから好評を博し、藩主の献上品として毎年幾反かの上納ができるようになる。明治16年ごろから、鹿児島や大阪の呉服店で取引されて大島紬の真価が認められ、需要が急に増大する。これに伴い手紬糸では生産が間に合わなくなり、明治28年頃から練り玉糸を名古屋方面から取り寄せるようになる。また明治30年頃から地機に代わり高機が用いられるようになると経緯にも絹糸が用いられ生産量が増大する。市場、需要の要請、使用目的に適合したものを供給する意味で品質保証技術¹⁶⁾が軽視されることが懸念されたが、紬独特の風合いを考慮すれば原料糸には手紡ぎ糸を使用すべきとの議論も出された。その後、工業試験場の研究、ならびに「本場大島紬」「京阪商人の警告」「郡内当業友志の会合」¹⁶⁾により、弾力、摩擦力、製織、売買いずれの面からも練り玉糸が優れるという結論がだされた。

昭和10年頃の本絹練り糸の採用は、玉糸の使用を前提として考えると、大島紬在来の真綿を使用した柄模様製織の手法よりも優れているとみられ、自然に大島紬の染織技術に同化したものといえる。

現在では大島紬には真綿で紡いだ糸は使用されていない。精緻な柄模様を織りだす本絹糸を

使用した織物が大島紬として認知されている。

(5) 大島紬の制作工程

伝統を誇る大島紬の特徴は泥染めの渋い黒褐色と精緻な緋文様にある。この大島紬が出来上がるまでには約37工程¹⁷⁾があり、熟練を要するために分業で制作している。大島紬は2度織られる。1度目は緋文様を織りだすために、経糸の綿糸で図案に合わせて絹糸を強く締める締機の工程である。この締機で織られたものを筵といい、締めが良くないと染料が染み出し不鮮明となる。締めには力が必要で男性の作業である。この締機の技法は明治40年に永江伊栄温¹⁸⁾により開発された。これにより緋の正確さと生産能率が画期的に向上することになった。機の2度目は染められた緯・緯の緋糸を正確に柄を合わせて文様を織りだす機織である。糸を傷つけないよう細心の注意を払いながら入念に織る作業で女性が行っている。この他、大島紬が出来上がるまでには何段階もの作業工程が存在する。主な工程としては意匠デザイン、糊張り、緋締め、染色（テーチ木液で染めた糸を泥田で染める）、仕上げ加工（緋筵解きや摺り込み）、製織、製品検査等がある。

さらに経糸、緯糸、地糸・緋糸ごとに幾つもの準備工程を経るため、企画から完成までには数か月を要する。主な工程作業¹⁹⁾は写真3の通りで、緻密さと熟練が必要であるために工程ごとに職人が分業している。

現在、伝統工芸品「大島紬」を支える工程を継承できる技術者も減少している。



図案制作



糊付け



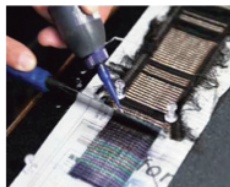
締機



テーチ木染



泥染



摺り込み



製織



経緯糸調整

写真3 大島紬の制作工程

(6) 大島紬の伝統文様

大島紬の文様は奄美の自然の中の植物や動物、生活用品等がモチーフ²⁰⁾として幾何学的に表現されている。染織技法の発達と共に次第に精緻な緋文様へと発展する。現在では伝統文様から自由な文様の表現まで、多彩な緋絵巻きが繰り広げられている。写真4は基本モチーフ²¹⁾²²⁾、写真5は伝統文様である。

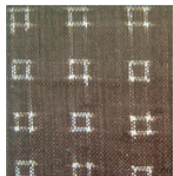
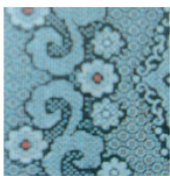
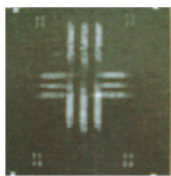
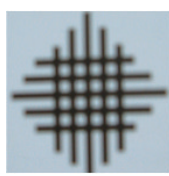




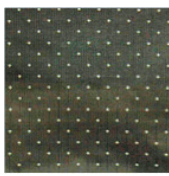

				
柁	ハブ	花	ウニ	ソテツ
				
トンボ	あられ	星	十字	風車

写真4 基本モチーフ文様

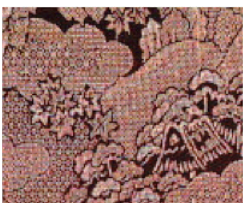

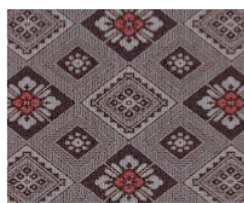
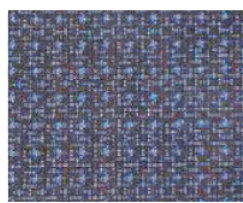
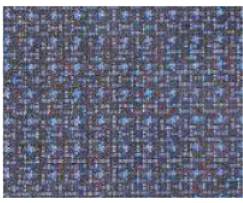
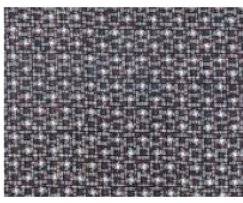
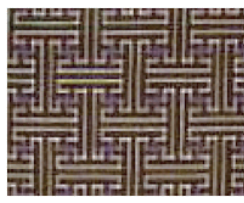
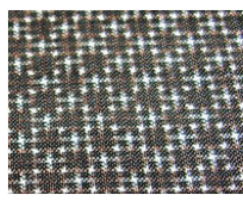
			
割り込み柄	亀甲柄	龍郷柄	有馬柄
			
西郷柄	白雲	秋名バラ	米十字

写真5 大島紬の伝統文様

4. 現代に生きる大島紬

(1) 伝統工芸品大島紬活性化推進の取り組み

現代の生活スタイルに合った大島紬の活かし方を研究するため、学生による作品製作を行い学内、学外での発表会を実施した。

各年度の取り組みの成果をまとめて以下に示す。

第1回（平成15年度）	独創的な大島紬のドレス展開 ―つむぐ華―
発表期日場所	・ 大学祭 10月25日 ・ 本場大島紬振興フェスティバル（山形屋） 平成16年4月23日～25日
	
第2回（平成16年度）	大島紬が甦る服飾工芸品及びインテリア製品
発表期日場所	・ 大学祭 10月27日 ・ 本場大島紬振興フェスティバル（山形屋） 平成17年4月22日～25日
	
第3回（平成17年度）	晴れの装い ―特別な日は華やかに―
発表期日場所	・ 大学祭 10月22日 ・ 本場大島紬振興フェスティバル（山形屋） 平成18年4月21日～24日
	

第4回 (平成18年度)	シニアのおしゃれなファッション
発表期日場所	・ 大学祭 10月28日 ・ 本場大島紬フェスティバル (山形屋) 平成19年3月3日
 	
第5回 (平成19年度)	ママとお揃いのこども服
発表期日場所	・ 大学祭 10月27日 ・ 本場大島紬フェスティバル (山形屋) 平成20年3月1日
 	
第6回 (平成20年度)	大切なあなたと —ペアルック—
発表期日場所	・ 大学祭 10月25日 ・ 本場大島紬フェスティバル (山形屋) 平成21年2月21日
 	

第7回（平成21年度）	Real Cloth
発表期日場所	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学祭 10月24日 ・ 本場大島紬フェスティバル（山形屋） 平成22年2月27日
	
第8回（平成22年度）	Material 大島 —大島紬のとりこになった私—
発表期日場所	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学祭 10月23日 ・ 本場大島紬フェスティバル（山形屋） 平成23年2月26日
	
第9回（平成23年度）	New Generation —伝統が織りなす美しさ—
発表期日場所	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学祭 10月22日 ・ 本場大島紬フェスティバル（山形屋） 平成24年2月18日 ・ 卒業制作展（かごしま県民交流センター） 平成24年2月24日
	

第10回 (平成24年度)	伝統とモダニズム ―個性が織りなす美しさ―
発表期日場所	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学祭 10月27日 ・ 卒業制作展 (かごしま県民交流センター) 平成25年2月24日 ・ 本場大島紬と鹿児島島の食を楽しむタベ (マルヤガーデンズ) 平成25年3月13日 ・ 天文館ストリートファッションショー (ぴらもーるアーケード) 平成25年3月16日



第11回 (平成25年度)	紬 A la mode
発表期日場所	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学祭 10月26日 ・ 本場大島紬産地まつり (MBCメディアホール) 平成25年11月30日 ・ 卒業制作展 (かごしま県民交流センター) 平成26年2月21日 ・ 本場大島紬と鹿児島島の食を楽しむタベ (サンロイヤルホテル) 平成26年2月18日 ・ 天文館ストリートファッションショー (ぴらもーるアーケード) 平成26年3月22日



(2) ファッションショーに関するアンケート調査

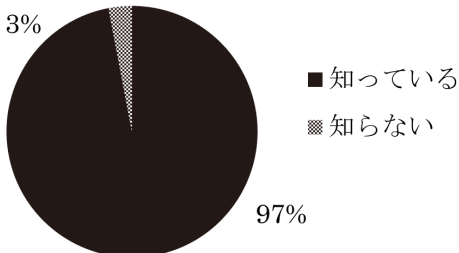
1) 大学祭「独創的な大島紬のドレス展開 -つむぐ華-」平成15年10月25日。アンケートの回答者数64人。年齢構成は10～30歳代が52%，40～70歳代48%。アンケート調査の結果を図3（質問1～7）の円グラフで示す。

- ① 大島紬を知っているが97%であるが（質問1），これは鹿児島の特産品として浸透しているためと考えられる。また，着装したことがあるが42%だが（質問2），これは40歳位以上の回答が反映していると推察される。
- ② 大島紬きものショーに対する印象は，多い順に①上品22%，②帯結びが美しい18%，③光沢がある17%，④しなやかである16%，⑤絣が美しい，着付けがいい13%の順である（質問3）。大島紬は落ち着いた渋い色合いであるが，上品という回答が多かった。この結果から大島紬は若い世代にも共感できる高級絹織物だと推察できる。
- ③ 大島紬のきものを着てみたいが92%と多く，その理由は，上品な感じ，素敵，柔らかくて着やすい感じ，気取らずに着れそう，独特の美しさがある，この他多くの感想があった（質問4）。一方，着たいと思わないの回答の理由は，価格が高いというものであった。

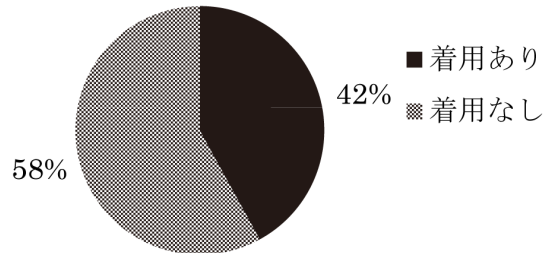
今回，学生たちがデザイン製作した洋装のドレスについては，学生達の感性とアイデアに関し予想以上の評価を受けた（質問5）。大島紬のドレスを着てみたいとの回答が約88%もあり（質問7），大島紬はきものだけでなくドレスにも相応しい織物であることを示唆している。

以上の結果より，現代の生活スタイルを視野に入れた大島紬のドレス化への研究開発が伝統工芸品大島紬の継承と活性化に繋げていけるのではないかと確認することができた。

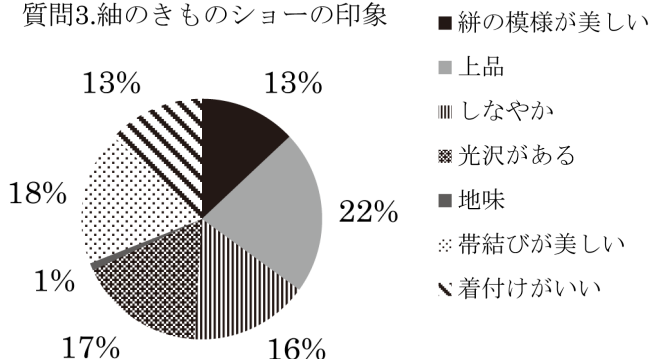
質問1.大島紬を知っていますか



質問2.着物を着たことがありますか



質問3.紬のきものショーの印象



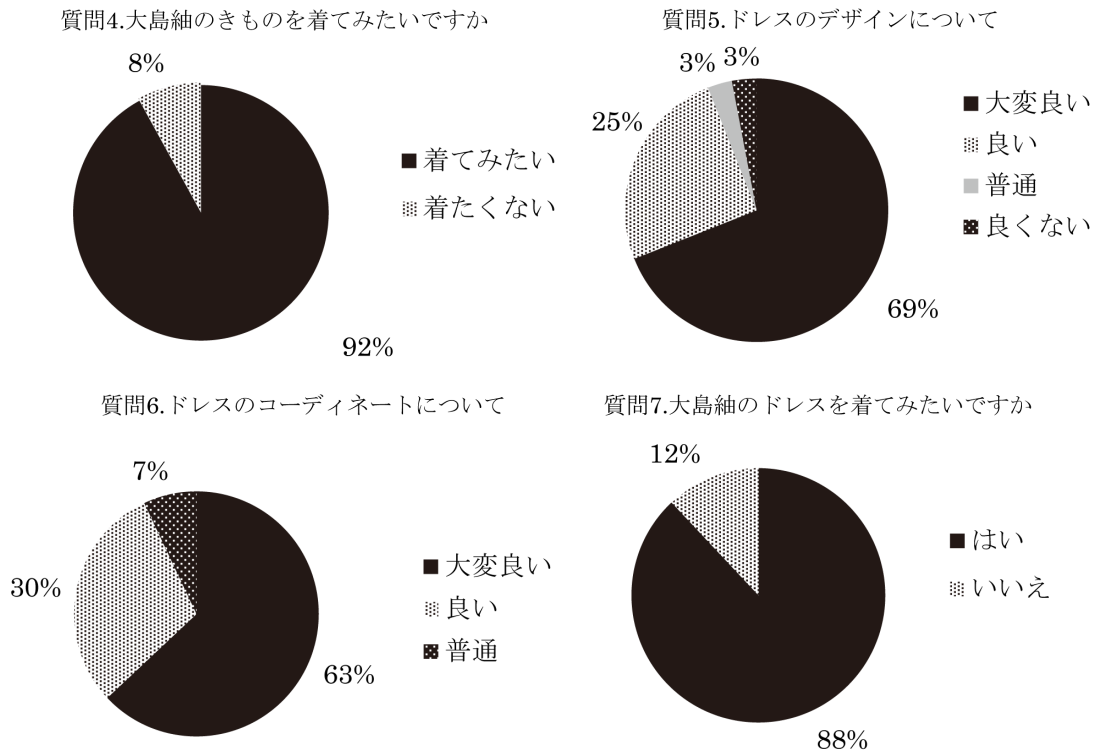


図3(質問1～7) ファッションショーに関するアンケート結果

2) 大島紬フェスティバル「晴れの装いー特別な日は華やかにー」平成18年4月21日。作品を百貨店に展示，感想並びに要望等についてのアンケート調査結果を以下に示す。

① 大島紬についての感想

- ・大島紬は着物というイメージを持っていたがドレスなどを見て楽しむことができた。
- ・大島紬は暗いイメージであったが織り方やデザインで変わることがわかった。
- ・しなやかで風合いがよく着やすい感じがした。
- ・色合いが落ち着いているので誰にも似合うと感じた。
- ・大島紬の良さを改めて理解できた。

② 学生が製作した作品について

- ・若者らしいデザインが素敵である。
- ・配色がよくお互いの色を引き立てる作品を楽しむことができた。
- ・既製品と変わらないくらい仕上がりが丁寧である。

③ 着物と袴，ブーツのスタイルについて

- ・短い袴は現代風でかわいいイメージ，またブーツとよく合っている。
- ・とてもかわいく，自分の娘に着せたい。
- ・年輩の方は袴の丈は長い方が良いという意見が多かった。つまり年齢により違いが見られた。

④ 大島紬活性化に向けての要望

- ・大島紬を使って作品を作るのは鹿児島県の学生でないとできない研究である。
- ・素晴らしい作品なのでたくさんの人が行き交う鹿児島空港や中央駅でも展示を是非してほしい。

5. 研究成果と今後の課題

平成15年度に郷土の伝統工芸品大島紬活性化・推進の取り組みについて丸久織物協同組合の協力依頼を受けて現在に至っている。これまで11年間に亘って研究が続けられたのは、郷土の服飾遺産に秘められた繊細な緋文様に見られる高度な技法と、歴史を超えて気品漂う装いの美しさに魅せられたのが要因である。

現代社会における科学技術の進歩は目覚ましく、経済性、機能性、利便性を優先する豊かな生活を享受する中では、長い歴史を経て育まれてきた文化的な服飾遺産は忘れられてゆく状況にある。このような実態を鑑み、郷土の服飾遺産を後世に継承する教育の一助にと考え本研究に取り組んだ。これまでの研究成果及び今後の課題は次のように要約できる。

①大島紬は本来、きものの織物として製作されたものであるが、現代の生活スタイルはきもの離れが進み洋風化が主流となっている。この社会のニーズに対応するため、フォーマル、カクテル、カジュアル等のドレス製作を試みた。ファッションショーのアンケート分析結果より、約90%が大島紬のドレスを着装したいという関心の高さから洋装にも展開できると考えられた。

②大島紬は泥染めと繊細な緋文様が特徴である。渋い黒の色調は一般に年輩者好みと考えていたが、大島紬のファッションショーの印象は上品であるという回答が多く、地味であるは僅か1%であった。年齢を問わず、共感できる織物であると推察された。

③若者の独創的で柔軟な発想は、時代感覚に敏感に反応し固定観念に捕われることが少ないために、個性的でユニークな作品が製作できるメリットがある。一方、製作過程においては高度の技法を必要とするため、技術が未熟な学生には製作の難しさが見られた。

④平成15年から始めた研究の成果は、学生たちの関心と一般の共感を得て、平成20年度から生活クリエイトコースのカリキュラムに「地域文化研究」として導入できたことは意義ある成果といえる。

⑤郷土の服飾文化「伝統工芸品大島紬」を活性化・推進するためのイベントは地域に限らず、多くの県内外の人が行き交う空港や駅ターミナルなどでの企画も必要であるという意見がアンケートに寄せられた。今後の検討課題といえる。

⑥「大島紬」活性化・推進を図るために、観光業界、官公庁、一般企業等の制服に大島紬を採用し、大島紬の着心地の良さと気品ある美しさをアピールするなど多くの人の目に留まるようなプロジェクトを展開することが効果的と考えられる。

⑦大島紬の伝統を守るためには、就労条件の改善、染織技術の後継者育成などについて郷土の文化研究者、大島紬業界、専門の研究者を含め、国や県の行政等が一体となって課題に取り組む必要があると考えられる。

謝辞

本研究を進めるにあたり多大なご支援を賜りました窪田織物株式会社, 丸久織物協同組合, 本場奄美大島紬織物協同組合に心から感謝申し上げます。また, ファッションショーのウォーキングや演出をご指導下さいましたアルティミス乙守三千代氏に心から感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 西之園君子, 洋装用に開発されたドレス展開, 日本繊維製品消費科学会 (2004)
- 2) 東大寺献物帳, 帝国博物館, 博物館 (1880)
- 3) 本場奄美大島紬協同組合創立80周年記念誌, 本場奄美大島紬協同組合編集 p 59 (1981)
- 4) 茂野幽考, 大島紬の歴史, 南日本文化協会, p 18 (1996)
- 5) 上田雄, 遣唐使全航海, 草思社, p 38 (2006)
- 6) 上田利夫, 阿波藍民族史, 教育出版センター, p 347-349 (1983)
- 7) 徳永嘉美, かすり, デザインの源流, 織の街道実行委員会, p 111 (2007)
- 8) 石橋博, 大島紬の研究－経済・科学・デザイナー－鹿児島県立短期大学地域研究所編, p 47-48 (1986)
- 9) 名越佐源太, 國分直一, 恵良宏, 南東雑話, 平凡社, p 50 (1984)
- 10) 染川弘光, 日本の手わざ第2巻大島紬, p 41-49 (1942)
- 11) 石橋博, 大島紬の研究－経済・科学・デザイナー－鹿児島県立短期大学地域研究所編, p 164-173 (1986)
- 12) 脇元理恵, 田崎和江, 縄谷奈緒子, 池田頼正, 今井茂雄, 佐藤和博, 奥野正行
奄美大島紬を染める泥の特性, 地球科学58巻, p 199-214 (2004)
- 13) 本場奄美大島紬協同組合創立100周年記念誌, 本場奄美大島紬協同組合編集, p 48 (2003)
- 14) 上村六郎, 沖縄染色文化の研究, 第一書房, p 261-272 (2013)
- 15) 長松秀志, 大島紬織物業の実態分析－大島紬織物業の成立及び, 発展過程の史的背景－,
九州商科大学商経論, p 47 (1962)
- 16) 岩下正弘, 和装織物産業における在来技術と外来技術, 国連大学, 人間と社会の開発プログラム研究報告, p 49 (1982)
- 17) 西之園君子, 鹿児島の伝統工芸品「大島紬」に関する研究 (第1報) 鹿児島純心女子短期大学研究紀要, p 57-66 (2004)
- 18) 本場奄美大島紬協同組合創立50周年記念誌, 本場奄美大島紬協同組合編集, p 84 (1984)
- 19) 奄美大島の大島紬－鹿児島のチカラ・歴史・文化, 鹿児島県,
<http://www.pref.kagoshima.jp/>
- 20) 緋文様, 沖縄・奄美・鹿児島・久留米, 織りの海道実行委員会, p 108-112 (2007)
- 21) 大島紬緋文様集小柄(伝統柄), 鹿児島県工業技術センター成果発表予稿集 p 10-11 (2011)
- 22) 藤都喜エ門, 都喜エ門大島紬作品集, 藤絹織物株式会社, p 79 (1994)